

文献紹介 ー日本ー

MICHIYO YOSHIDA (吉田通代) 著

Women, Citizenship and Migration: The Resettlement of Vietnamese Refugees in Australia and Japan

(ナカニシヤ出版、2011年)

本書は、南ベトナム崩壊から1995年にかけて、オーストラリアと日本の難民政策がベトナム系女性難民の移住過程にどのような影響を与えてきたのかを、市民権の観点から論じた書物である。ここで取り上げられる市民権は、移民や難民を対象とする国際移民研究で注目を集めており、まさにホットなキーワードと言える。また分析対象が女性難民であることから、ジェンダーの視点が生かされていることも、本書の特徴のひとつと言えよう。

以下で、本書の内容を確認したい。本書は、序章と結論をふくむ10章からなる。第1章で本書の課題が述べられた後、第2章では、本書が依拠する市民権概念について政治的なパースペクティブとネーションフッドの視点を中心に検討され、オーストラリアと日本が対照的な市民権制度を採る国々と位置づけられる。そのうえで第3章では、両国における市民権制度について、市民権制度の発展、市民の権利、市民権取得の条件、移民に対する処遇といった観点から比較検討がなされる。第4章以降は、市民権制度とベトナム系女性難民の移住過程との関係が検討される。まず第4章で、著者が実施したフィールド調査の概要が提示される。第5章では、オーストラリアと日本におけるベトナム系難民の流入経緯とともに、彼らの居住地や年齢構成、社会経済的地位などについて、マクロデータをもとに確認がなされる。つづく第6章から第8章までが、調査内容の検討にあてられ、ベトナム系難民の受け入れ政策の概要(第6章)、ベトナム系女性難民の雇用や教育、家族ケア(第7章)、エスニック・アイデンティティや社会関係、国籍取得(第8章)について検討がなされる。第9章と第10章では、これまでの研究成果がまとめられたうえで、本書全体の主張が述べられる。

本書は、難民の移住過程の国際比較を行った数少ない研究成果である。また日本における難民の移住過程を検証したフィールド調査は決して多くはなく、その意味でも本書が与える知見は有益である。加えて本書は、ベトナム系女性難民が直面する課題を広範囲にカバーしており、女性難民の移住過程を捉えるうえで、さまざまな示唆を与えてくれるものだ。難民に関する実証研究に取り組むうえで、本書が様々なアイデアを与えてくれる一冊であることに間違いはない。

こうした点を確認しつつ評者が気になったのは、本書が扱うデータが1995年頃までであり、本書の刊行時期からすると、やや時間が経過している点である。この間の世界的な難民受け入れの厳格化と並行して、オーストラリアの難民受け入れも厳しくなり、日本でもベトナム系難民を対象としたインドシナ難民政策が2005年に終了するなど、難民を取り巻く国際環境は変わってきた。こうした変化を受けて、ベトナム系女性難民の移住過程にはどのような影響が見られるのか、またこうした変化を著者自身がどう捉えているのかが、評者としては気になった。

本書は、数多くのベトナム系女性難民から貴重な語りを聞き取り、分析した労作である。このように難民たちの声をつかみ、彼らの受け入れ国への社会統合を解明しようとする試みは、難民研究が今後取り組んでいく必要があるものと言えよう。

人見泰弘(名古屋学院大学)